

「もの思はしき人は」考

—『蜻蛉日記』下巻試論—

平野美樹

一

『蜻蛉日記』下巻は、冒頭の「今年は…思ひなげかじ」に対応するかのように、中巻までの核をなしていた激しい感情の動きが記事の表層から影を潜め、一見不統一な素材が時を追って並ぶ形となっている。この一見不統一な素材の中から何を読み取り得るのかが、下巻を論ずる上での最大の課題であると思われる。主題の分裂・深化、あるいは物語性といった問題は^(注1)、まさにこの点から投げかけられてきたものである。

下巻の第一年目、天禄三年五月、道綱に兼家宛の文を託していた道綱母は、戻ってきた息子から兼家が不在の文を届けられなかったと聞く。道綱の報告に、「めでたの事や」と嘆息とも皮肉ともつかぬ言葉を漏らした道綱母は、自分の「このごろ」を内省し始める。

ほととぎすの声もきかず。もの思はしき人は寝こそ

寝られざなれ、あやしう、心よう寝らるるけなるべし。これもかれも、「一夜聞きき」「この暁にも鳴きつる」といふを、人しもこそあれ、我しもまだしいはんもいと恥かしければ、物いはで、心のうちにおぼゆるやう、

我ぞけにとけて寝らめやほととぎすもの思ひまさる声となるらん

とぞ、しのびていはれける。(1087)

「ほととぎす」をめぐって、「心よう寝らるる」自らの様子、ほととぎすの声を競って聴く周囲の人々の会話、独詠歌へと展開するこの短い記事は、身辺雑記的な中に道綱母の自分及び周囲への意識、〈歌〉の意識などが端的に表われており、先に述べた下巻の諸問題と関りの深い要素を持っていると思われる。本稿ではこの「ほととぎす」の記事を基点に、下巻、とりわけ第一年目の天禄三年の記事について考察し、『蜻蛉日記』全体における下巻の位

置を計測する手がかりとしたい。

「めでたの事や」のつぶやきの後、「雲のたたずまひ（五月雨）」「田子の裳裾」に続けて、この季節の和歌の最も重要な素材の一つである「ほととぎす」に連想が及ぶと、その声を「きかず」にいる自分に思い当たる。この後の一文について、諸注、「け」を「ため」「せい」の意味に解し、眠っているせいでほととぎすの声を聞かないと言及する文脈と解するものが多いが「け」にそうした用法は考えにくく、疑問である。「我ぞけに」の歌を見る限り、道綱母は自分がまるで物思いのない人間のように「とけて寝」ているとは俄には認められないのである。そして、「あやしう」はほととぎすの声を聞かずにいる自分の「け」―「気配」「様子」をいぶかしむ表現と見なければならぬだろう。「心よう」寝てしまっているのかもしれない自分のありようをどう受け止めたらいいいのか、それがこの部分での大きな問題となっている。だからこそ、ほととぎすについて語り合う周囲の者たちに対して、「人しもこそあれ、我しもまだしといはんもいと恥かし」という強い自意識を持たねばならなかった。

この「心ある者」としての「エリート意識」ともいわれる（ママ）自意識の基盤となっているのは、「もの思はしき人は寝こそ寝られざなれ」に示された、物思いのある

人Ⅱ「寝られぬ」人Ⅱ自身という自己認識である。寝ていてほととぎすの声を聞いていない様子とは、彼女にとってありえないはずの姿であったが故に、それを凝視し、言及せざるをえなかった。ここには、道綱母にとつてのあるはずの自己の姿と、そこからはずれた自己の姿とをめぐる葛藤が見えている。こうした作品世界における自己像についての葛藤は下巻のどのような表現形成を示しているであろうか。「不統一な素材」の意味が問われてきたとは、言い換えれば書き続けられていくことの意味そのものが問われてきたということでもある。以下、（書く）ことが続いていく過程を視野に入れつつ、物思いのある人Ⅱ「寝られぬ」人Ⅱ自身、の等式の持つ意味からまず探っていくことにする。

二

「もの思はしき人は……」については従来、特定の引歌というのではないが、多くの類歌（先行歌）が指摘されている。そうした指摘をふまえた上で、「我ぞ……」の歌まてを含めた語句・発想と類似するものを試みに幾つか挙げてみると次のようになる。

1. ものおもへばいもねられぬをあやしくもわするること
ことを夢にみるかな（古今和歌六帖・四・ゆめ）

2. ほととぎすいたくななきそひとりゐていのねられぬにきけばくるしも

(古今六帖・五・よるひとりをり)

万葉集・八(四句「いのねらえぬ」)

3. わがごとく物やかなしき郭公時ぞともなくよただなくらむ (古今集・恋二／古今六帖・六・ほととぎす(五句「夜夜に鳴くらん」))

4. 我がごとく君にこふるはほととぎすこのよすがらにいねがてにする (古今六帖・同)

5. ほととぎすよぶかきこゑは月まつとおきていもねぬ人ぞききける (同)

6. うちとけていもねられねばほととぎすよぶかきこゑは我のみぞ聞く (同)

7. わがごとく物やかなしききりぎりす枕つどへによもすがらなく (同・きりぎりす)

8. きりぎりすいたくななきそ秋の夜のながきおもひは我ぞまされる (同)

これらの類歌では、①ほととぎすの声を聞くこと、②物思いを抱えていること、③寝られない状況にあること、の三つの状況うち、二つまたは三つが結び付けられている。この三つの要素はいずれも、すでに歌の素材としては定着していたものと考えられる。特に②と③の結び付

きの強さは、「もの思はしき人は……」に語句の最も近接する1『古今六帖』で「よるひとりをり」「ひとりね」などが題として掲げられること、また2・3に対して7・8のような歌があること、などから十分読み取りうる。『蜻蛉日記』の表現もこうした発想に支えられていることは疑いないであろう。更に、後代への浸透を見るならば、『和泉式部日記』、『枕草子』には次のような一節もある。

「掃りぬるにやあらむ。いきたなしとおほされぬるにこそ、もの思はぬさまなれ。おなじ心にまだ寝ざりける人かな、たれならん」(中略)「いでやげに、いかに口惜しきものにおほしつらむ」(九月二十日余)「さて、昨夜、明しも果てで、さりとて、かねて、さ言ひしかば、待つらむとて、月のいみじう明きに、西の京といふ所より来るままに、扇を叩きしほど、かろうして寝おびれ起きたりしけしき、答へのはしたなさ」など、語りて笑ひたまふ。(七九)

『和泉』の例は、夜門を叩く音に応対できぬ女が、来訪者(帥宮)に「もの思はぬさま」とみなされ、「口惜し」と評価されることを危惧する部分である。「をりふし」を見過ぎぬ宮様の相手としては、本来物思いに寝られぬ女の姿がふさわしい。女はこの後、自分がこの時いかに物思いに耽っていたかを巧みな文によって伝え、それ以後

二人の仲は一層の進展を見る。『枕草子』七九段では『和泉』の例の逆をいくような形になっており、男は女に対してひどく興奮的な感想を持っている。『枕草子』は他にも、待ち人が来ないままに寝入ってしまうあさましき(九三段)をとりあげたり、恋の場面ではないが、夜寝ずに過ぐす人の気配を「心にくし」と評したり(一九二段)している。

こうした例から伺えるのは、一旦歌の素材として定着したある状況や発想は、ある種の美的要素として現実の場面(あるいは現実から文学作品のなかに切り取られてくる場面)を規定していく要素となるということである。とくに『和泉』の例からは、その規定のありようが鮮明に見えてくる。〈女〉とは男とのことを思い悩んで寝られぬものなのであり、またその思い悩み、「寝られぬ」姿をこそ、〈男〉は評価するはずなのだ。もの思いに「寝られぬ」歌が作られ、流通することにより、もの思いに「寝られぬ」状況もある意味では流通するのである。道綱母が「あやしう」と感じたのは、「心よう寝らるる」ことそのものではなくて、もの思いを持つ人であるはずの自分が、ほととぎすの声を聞いていないこと、言い換えれば、もの思いを持つ人ならば迎えてしかるべき状況を迎えていないことに対してであった。「人しもこそあれ…」と記

された強い自意識は、『蜻蛉日記』の現実がいかに歌の言葉による発想と不可分なものであったかを示しているのである。

三

それでは『蜻蛉日記』では、もの思いと「寝られぬ」はどのように結び付いてきたのだろうか。上中巻をたどってみると、「寝られぬ」に関連のある記事が五例ある。最初に「寝られぬ」姿が描かれるのは天曆九年十月の記事である。

あかつきがたに門をたたく時あり。さなめりと思ふに、うくて、あけさせねば、例の家とおほしき所にものしたり。つとめて、なほもあらじと思ひて、

なげきつつひとりぬる夜のおくるまはいかにひさしきものとかはしる(四一)

歌で訴えられているのは、嘆いて独り寝をし、そのまま夜を明かしてしまうことのわびしさである。とは言っても、この歌が詠まれたのは、町小路女との関係を知った道綱母が、兼家の来訪を拒絶した翌朝のことで、「あくるま」の掛詞にはその事情も詠み込まれている。「ひとりぬる」は虚構とは言えないまでも、歌を贈られた兼家にしてみれば、昨夜のこととしては承服しかねるところも

あろう。しかし「ひとりぬる」が昨夜のことだけではなく、道綱母のこの頃常に抱いていた感情を表わしているため、この歌は新しい女性との関係に対する抗議と自分を顧みてほしいという願いとを、強く訴える力を持っていた。仮にこの夜の状況と合わぬ部分があるとしても、「ひとりぬる」は道綱母にとって最も象徴的な言葉として選ばれたのである。

勿論、「寝られぬ」夜が嘘であるというのではない。この夜、おそらく道綱母は寝られなかったであろうし、この少し前、兼家が「三夜しきりて見えぬ」時にも、あとを付けさせて町小路女 の存在を知った時にも、決して心穏やかに寝ていたりではできなかったであろう。新しい女の存在に脅威と不安を感じ、夫を非難したい気持ちを抱え続けていたに違いない。ただ、その穏やかならざる気持ちを歌の形にして表現する時、「ひとりぬる」——「寝られぬ」姿が最も象徴的なものであったことを確認しておきたい。

また翌年秋、町小路女との関係が続く中、兼家は参内の道々道綱母邸を素通りし、道綱母は通行を知らせる咳払いの音を聞くまいと思いつつ「寝も寝られず」一夜を明かす。

夜中、あかつきと、うちしはぶきてうちわたるも、聞

かじと思へども、うちとけたる寝も寝られず、夜ながうしてねぶることなければ、さななりと見聞く心ちは、なにかは似たる。いまはいかで見聞かずだにありにしがなと思ふに、(24-10)

同内容の反復のような傍線部は、前半は「二」で挙げたような和歌に、後半は「上陽白髮人」(『白氏文集』三・新樂府)の一節「秋夜長夜長無眠天不明」によるものである。『蜻蛉日記』の引歌については「古歌(詩)のイメージによって個の内部経験が言葉の秩序にかたどられるものとして照らし出され、そのことばの秩序として外化されたそのかたちによって指示される基調のうえに、さらに掘り起こされる内部経験が、状況としてのことばの世界を形成することになるのであった。」(註3)の指摘のように、言葉の上だけでない、経験と密接な関係を持つものであって、この「夜ながうして」などは典型的と言える例である。こうした引歌の表現とは、既成の歌ことばの発想によって、個々の経験が映し出される最も顕著なありようである。道綱母のように歌の世界に親しんできた者にとっては、所謂引歌に限らず、〈書く〉ことすべてにそうした過程が内在していたと言っても過言ではないであろう。例えば天禄元年十二月の

思ひせく胸のほむらはつれなくてなみだをわかず物

の歌は「寝る所にもあらで、夜は明かしてけり」という状況で歌われたものだが、道綱母は、男が悪天候をついてやってくる(雨の訪問)といった発想を過去の兼家の姿に重ねながら(注4)、自らがその対極とも言うべき独り寝の状態におかれていることを述べている。自らの経験である「前渡り」という現実、どうにも解消しきれない不安感について思い返す時、意図的な選択ではなくとも、あるいは意図しないからこそかえって強く、自分の表現世界を培ってきた規範性がつきまとう。

多くの眠れぬ夜の経験は事実には違いないだろうが、「寝られぬ」姿を描き出すことによって、もの思いを抱える自分をより際やかに表現しようというのをもまた事実であろう。歌ことばによる文学的発想は、道綱母にとって単なる表現手段ではなく、生きる姿勢そのものであって、とりわけ兼家に向かう時、その姿勢はより高揚する傾向にある。作品全体の転機と言える中巻の鳴滝籠りの動機は、道綱母自身の言葉では、兼家宛の文に「前渡りせさせ給はぬ世界もやあるとて」と記されている。「前渡り」は兼家に対する不安感・不信感を募らせていった最も大きな要因であった。実際には兼家が素通りしていく事のみでなく、兼家の訪れを神経を研ぎ澄ませて待つ状況すべて

が、道綱母を鳴滝へ駆り立てた「前渡り」であったことは間違いない。例えば天禄元年五月の記事で、彼女が「寝られぬ」原因としてあげる「世界の車のこゑ」へのひりひりとした感応のありようについては既に指摘のある所でもある(注5)。「前渡り」とは、不安に満ちた待つ時間、全神経を来訪の気配―音―に集中させている時間であった。そうした「前渡り」の世界の様々な経験を(書く)、再構成する時、歌ことばによる発想がより強く働いていたであろう事は想像に難くない。歌ことばの発想において、もの思うこととはすなわち「寝られぬ」こととして一つの類型となり得ていた。中巻までの自分を思い描こうとするとき、寝られぬ夜が多くあったという事実がことうした発想と強く結び付くことで、彼女にとっての現実となる。(書く)ことは常にそうした過程のくり返してあった。

四

以上のように上・中巻の「寝られぬ」ことの意味を考察してみると、下巻で突然「寝る」姿が描かれ始めることに注目せざるをえない。下巻においては、先に示した「ほととぎす」の記事以外にも、「寝る」ことの記事が六例あり、うち五例が「ほととぎす」の記事と同じく天禄

三年の一月から三月に集中しており、また「ほととぎす」の記事を除くと、きまって兼家訪問に関わっている。

今はものともおぼえずなりにたれば、なかなかいと心やすく、夜も、うらもなううち臥して寝入りたるほどに、門たたくにおどろかれて、あやしと思ふほどに、ふとあけてければ、心さわがしく思ふほどに、妻戸口に立ちて、「とくあけ、はや」などあり。前なりつる人々も、みなうちとけたれば、逃げ隠れぬ。(天禄三年一月、172-3)

「寝る」姿がはじめて描かれる場面であるが「うらもなう」眠ってしまった理由が「今はものともおぼえずなりにければ」と説明されている。「かかれど」が直接承けているのは、兼家に「御前申しこそ、御いとまの隙なかべかめれど、あいなけれ」(172-1)と、ちらと不満を仄めかすような文を贈った部分である。大納言に昇進した兼家は、何も言ってよこさない道綱母に対して「なかか音をだに」などと度々便りをする。昇進に際して、「わがためは、ましてところせきにこそあらめ」(171-7)と、一人そぐわめ複雑な思いを抱いていた道綱母は、兼家に何も言おうとはしなかった。「御前申し…」はその沈黙の挙げ句に出た言葉である。歌そのものにも、また歌ことばにもよらず、兼家の政務を直接表わす「御前申し」の語を

用いたこの返事は、相手の事情を理解していると表明することで、嘆訴の無益さのみならず、無意味さを確認している、自身の不満の感情は「あいなけれ」の一語のみに抑制されて示される。こうした態度は昇進の折の「わがためは、…」とも呼応している。「かかれど」は、事情を納得しているにも関わらず、兼家に向けて「あいなけれ」などと言ってみた、そのことを承けての逆接である。つまり、ここで改めて記される「今はものともおぼえず…」は嘆くまいとする意志の表明ではない。不満を仄めかしてはみたものの、今は何とも感じなくなっている、という道綱母の現状認識の表明なのである。勿論兼家との仲を思えば、嘆きの種がなくなるはずもない。しかし、これまで積み重ねてきた関係は、もはや、自分にも、兼家にさえも今更変えられないようなものではなくなっている。愛情だけでなく、地位や立場、子どもの存在など、周囲のすべてが二人の関係を現状に固定してきた。道綱母はその現状を十分に見つめ、認識した上で、黙っているより無いのである。

こうして沈黙する彼女の様子は、一見抑圧された状態のようにも見える。しかし実は一種の解放の側面も持っていたのではないか。勿論、嘆きがなくなったわけではなく、また真に彼女が嘆きから脱却し、すっかり別の境

地に至ったわけでもない。ただ限定的にはあるが、嘆きを感じなくなってしまう状態が彼女の中で生ずるようになっているのである。その状態を端的に示していたのが、「ものともおぼえず」「寝入りたる」姿であったと言えよう。言わば下巻冒頭の「思ひなげかじ」がいつのまにか「ものともおぼえず」へと微妙にすり替わり、虚脱したような解放感が身をつつんでいる姿である。

この感覚は諦めや悟りといったものとは微妙に異なる性質のものであって、それは、兼家訪問のとらえ方にもあらわれている。先に掲げた箇所では、兼家の訪問が、眠り「うちとけ」ている道綱母を不意打ちし、動揺や緊張を引き起こしていた(注6)。「うらもなううち臥して寝入りたる」ところ、門をたたく音に「おどろかれ、続いて「あやし」「心さわがし」と動揺が記される。応対を急かす兼家側に対して、彼女の側は「前なりつる人々も、みなうちとけたれば、逃げ隠れぬ」という有様であった。道綱母は寝入り、女房達も「うちとけ」た様子でいたために、兼家の訪れに不意をつかれ、慌てふためいてる。どこか弛緩した、見苦しいと言われても仕方ないようなこの様子は、諦めや悟りといった意志的な姿勢だけでは説明できない。下巻前半には他にも、

あさましううちとけたること多くてあるところに、

午時許に、「おはしますおはします」とのしる。いとあわたたしき心ちするに、はひいりたれば、あやしく、我か人かにもあらぬにて向ひぬれば、心ちもそらなり。(天禄三年二月、二四二)

のような不意の訪問が度々描かれる。この部分は昼で、寝ているのではないが、「うちとけたること多くてある」ところへ兼家が訪れて来、「いとあわたたしき心ち」以下、道綱母の動揺が記される。この動揺ぶりは、兼家の訪問がいかに思いがけぬものであったかをうかがわせるのだが、動揺や緊張の原因が実は兼家側の気まぐれや疎遠さ以上に、道綱母側で作られていることを看過してはならない。「あさましううちとけたること多くて」あった時は、兼家から事前に「今日なん、いとくとと思ふ」と訪れを知らせる文が来ていて、道綱母はその文を「いとこまやかなり」と見、返事をする一方で、「よにもあらじ」と受け流して「うちとけ」ていたのである。兼家の訪れ自体が突然なのではなく、彼女の受け止める姿勢の中に、訪れを突然と感じ、動揺してしまう要因――緊張感のなき、解放感――があったことになろう。また中巻以前を考えれば、兼家を通う形で結婚生活を続けている以上、夫の訪問に常にある程度の突然さが伴っているのは特別なことではない。下巻初めに至って、訪問を突然と感じ、「心ち

もそら」に緊張してしまうほど、兼家不在の折の精神状態には奇妙な解放感が広がっていたということになる。

加えて兼家の訪問は、時としてそうした解放感を乱すきっかけとしても描かれる。

うちねたるほどに、門いちちはやくたたく。胸うちつ

ぶれてさめたれば、思ひのほかに、さなりけり。心

の鬼は、もし、ここ近き所に障りありて、掃されて

にやあらんと思ふに、人はさりげなけれど、うちと

けずこそ思ひ明かしけれ。(天禄三年閏二月、881)

他の女の所から来たのではないか——自ら「心の鬼」と言う疑惑にとらわれながら、兼家の傍らで「うちとけず」に一夜を明かす。夫のいる夜こそがかえって「うちとけ」ぬ思いを抱き明かす夜となってしまう。兼家の不訪にはなく、訪問によって不信感が頭を擡げ、解放感が消えている。夫のいる夜の、物思いに束縛された心理状態は、その直前に描かれた、物詣での心地よい疲労に「うちねたる」解放感とは極めて対照的である。

このように、上・中巻の核でもあった、夫の訪問を神経を研ぎ澄ませて待つ「寝られぬ」とは全く異なる、どことなく解放された「寝る」姿が、下巻前半には度々描かれている。しかし、本論の最初に掲げた箇所道綱母自身がいぶかしんでいるように、「寝る」姿とは、上・

中巻までで形成されてきた道綱母の自己像とは明らかにずれたものである。ここに、下巻であらたに生じてきた表現形成のありようを見出すことはできないだろうか。

五

下巻に至っての表現の変化についてはしばしば言及されるのは、歌を詠まなくなることである(注7)。ただ、歌の断念は即(書く)ことの断念ではない。問うべきは、歌が詠まれなくなったことと、日記が書き続けられていったことがどう関っているかである。

「うらもなうち臥して寝入りたる」夜、周囲の女房達も兼家の来訪に应对できずに逃げ隠れてしまったので、道綱母はやむをえず、戸口へにじりよる。

見苦しさにみぎりよりて、「やすらひにだになくならにたれば、いとかたしや」とてあくれば、「さしりてのみ参り来ればにやあらん」とあり。(172-17)

「やすらひに…」は『古今六帖』二の「君やこんわれやゆかんのやすらひにまきの板戸をささでねにけり(宅・と)」を引く。「まきの戸」は上巻の「なげきつ…」に対する返歌に兼家が詠み込んできたものである。道綱母はこの歌句を、今の自分がこの歌のような状

況ではないことを告げるために用いている。「やすらひにだに」は直接には訪れを期待して鍵をかけずに寝ることなどなくなってしまうから、の意であるが、「だに」が踏まえるところを、他の「寝る」ことに関する記事とも合わせて掘り下げてみたい。この数日後、先にも掲げた「あさましううちとけたる」折の来訪時、兼家が「今日なん、いとくとくと思ふ」と訪れの意思を伝えてきたのに対し、道綱母は「いととげにあめれど、よにもあらじ、今は人しれぬさまになりゆくものを、と思ひすぐして、」と対応していた。兼家にとって自分は「今は人しれぬさまになりゆく」のだという思いは、訪れを伝える文があつてさえ、それを「思ひすぐ」させようとし、その結果「あさましううちとけたること多くてある」状態にまでしてしまう。ここに働いているのは「思ひなげかじ」がいつのまにか「今はものとおぼえず」へとすり替わったのと同様な精神作用である。「やすらひにだに」のふまえるところもまた同様である。来る事を期待し、来ない事を恨むといった一連のもの思ひさえもはや抱けぬような状況に、今は至っている。その思いが自分側の不用意さを取り繕い、兼家を責める言葉になった時、「君やこん」の歌は「だに」と逆の形で引用されたのである。贈答歌的な応酬でありながら、兼家の「さしてのみ」が、「さ

(鎖)さで」↓「さ(指)して」と言葉の上では逆にしつつも、「あなたを直指してやってきた」という歌の発想自体はそのまま志向しているのに対して、道綱母の「だに」は自分が「うらもなうち臥して寝入」っていた、つまり歌の発想の上にはいなかったことをふまえたものとなっている。

兼家との関りの中で、歌の発想の上にはない自分を示そうとする――道綱母がやめようとしたのは、歌うこと、というより、歌ことばで、歌になりうるような発想で自分、とりわけ兼家と自分の関係をとらえることなのではないか。

「うちとけ」た「見苦し」き姿は、また、「鶯の初声したれど、ことしも、まいて心ちも老いすぎて、例のかひなき独り言もおぼえざりけり。(天禄三年一月、171-5)」に見られる「心ち」の「老い」とも通底している。この部分は歌を詠まない自分への自己言及で、歌を詠まないことを自らの老いと結び付けている。道綱母は下巻で老いの嘆き、容姿の衰えをあまり歌にしていけない。女としての老い、衰えを歌の発想からとらえれば、

今さらにかなる駒かなつくべきすさめぬ草とのが
れにし身を

のように、自分の姿は「男に忘れられた女」として象ら

れる。歌は自らの老いもさることながら、兼家との関係をいっそうつらいものと映し出してしまふ(注8)。歌にしないことで、そうした物思いはまず抑制され、自身でも気付かぬうちに時々は忘れていられたりもする。

一方で、下巻には「なよやかなる直衣、しをれよい程なる搔練の袿一襲垂れながら、帯ゆるるかにて、歩みいづるに(天禄三年二月、1181)」のように、以前はあまりなかつた兼家の堂々たる風姿の描写がしばしば見られる。「少し身をすらして華々しい男の姿をうっとり眺め」(注9)とも評されるこうした記述は、中巻以前には見られなかつたものである。清水氏の言われる「身をすらして」とは、すなわち〈書く〉ことの変化ではなからうか。堂々たる容姿に栄華を輝かせる兼家を、歌ことばの発想でとらえてしまえば、こうした記述はなしえず、やはり自分とはかかない関係に表現が収束していくであろう。しかし「四」で検証したように、下巻の道綱母には、兼家の不在に解放感を得、うちとけて寝てしまふひとときさえある。嘆きは依然として在るけれども、もはや毎夜「寝られぬ」夜を過ごしたりはせず、嘆く歌さえ詠まぬ日々があるのである。時々訪れてくる兼家に、歌ことばを基とした反発を含む物言いで互いの関係について述べることはせず、それはそれとして、眼前の男の堂々たる姿を

描写してしまふ。言わば、歌ことばでは表わしえない(日常)が、道綱母の〈書く〉ことに深い関りを持ち始めているのである。

「ほととぎす」の段は、こうしてあらわれはじめた(日常)が、元来の〈書く〉ことの根底をなしていた歌ことばの発想と対峙した一つの例であった。「もの思はしき人は寝こそ寝られざなれ」とは異なっていてしまっている自分の状態を、どう意味付けていくのか。物思いがない身とは決して言えない。兼家の自分への関心にしても、社会的待遇にしても、子どもの数にしても、どれ一つとっても彼女にとって思うようではないし、中巻の鳴滝籠りを経た下巻に至っては、それらがもはやどうにも変えられようもないことが更に明確になっている。上巻末の「思ふやうにもあらぬ身」のはかなさは、より極まっていると言ってもよい。しかし、そうした物思いは、長い間ずっと抱え続けてきていることによって、(日常)のものとなつている部分がある。そのため、今となつては物思いがあつても「心よう」眠れるのだということが、ここでは見出されつつある。それは長く連続する時間の発見でもあろう。が、道綱母がそのことを改めて言葉にしようとする、「寝る」姿に示される(日常)は、必ずしもうまく表わされない。「もの思はしき人は寝こそ寝られざな

れ、あやしう、心よう寝らるるけるべし」に見られた葛藤は、〈書く〉ことが継続される中で生じてきた表現形式の変容を示しているのである。

六

「思ひなげかし」と記すところから始まった下巻第一回目、天禄三年の記事は、「ほととぎす」の段に見られるように、〈書く〉ことと歌ことばの発想とがいかに関っているか、またその関りがどう変化していくかを物語っている。言葉を紡ぐ有効な手段である一方で、表現をからめとる力をも持つこうした発想を閉じた時、何が見えてくるのか。もっとも道綱母はそうした発想をすべて閉じきってしまったわけではないし、またこの閉ざしが意図的に行われたわけではない。ただ、兼家と自分との関係について、感情を抑制しようとする姿勢が、〈書く〉ことにおいては歌ことばの閉ざしとして作用したのである。その結果、重ねられてきた〈日常〉―日々の生活の根底に静かに沈殿する苦悩のありようが描き出されることになった。見方を変えれば、道綱母の中巻までの葛藤が、いかに〈書く〉ことと歌ことばの発想との関りと不可分なものであったかが、読み取れることになろう。

ここで改めて上巻冒頭部分の意味するところから、下

巻の意義を問うてみたい。

世の中におほかる古物語のはしなどを見れば、世におほかるそらごとだにあり、人にもあらぬ身の上ま
でかき日記して、めづらしきさまにもありなむ、天
下の人の品高き、宿訪はむためしにもせよかし、と
おほゆるも (注10) (9-4)

「身の上」について書くのだという宣言は、「そらごと」ではない現実性のある生を書くこととする意志に基づいている。ただ、この「身の上」の現実性が、「古物語」にあるような「そらごと」ではないこととして導き出されることに、看過すべきでない問題があり、道綱母の〈書く〉ことのありようが示されている (注11)。既に述べたことがあるので詳述しないが (注12)、上巻では一つ一つの経験の取り上げ方、枠取りの仕方に物語の場面の投影を思わせるものがあり、道綱母の「身の上」の「はかなさ」の表出は、しばしば経験が物語のように枠取られながら、その枠取りからはみ出していくところになされて、「はかなさ」の要因は、言わば兼家が〈物語の男〉ではないことに帰されていた。また中巻では頻出する回想表現の中に、歌や物語の場面を構成する重要な要素となる発想が深く関り、兼家に対する不信感の根底には、そうした物語的発想に対して生じてきた懐疑の存在があった。「身の上」

の眞実とは「物語」ではない現実であるという反指定的な過程を辿って、「物語」との落差の部分こそ日記の現実が積み重ねられてきたのである。道綱母にとって、「回想」し、「書く」という行為は、自らの経験を物語的発想に重ね、透かし見てしまうことのくり返してもあった。ここで言う物語的発想とは、個々のストーリーや話型などといった類のものではない。「物語」を成り立たせているごく端的な要素、本稿で取り上げた「寝られぬ」女や、歌によって女のもとへ留まる男、悪天候下に訪ねてくる男といったもの（注13）である。そしてこうした物語的発想を構築しているのは、道綱母にとって最も重要な表現手段である歌の言葉であり、物語的発想とはすなわち歌ことばの発想に他ならない。

中巻までで描かれる道綱母の自己像は、常に歌詠みとしての一面を持っていた。兼家に痛感させられる身のほかなさ―物語との落差―を嘆く時も、その嘆きの表現方法において、歌の知識才能が生かされていた。つまり歌ことばの発想は、表現することそのものに常に内在し続けられていて、現実性のある「身の上」を「書く」ことは、実は歌を成り立たせている虚構―嘘―ということではなく―にとらわれ、それと葛藤する過程でもあったのである。下巻に至って、兼家との関係をとらえること、「書く」こ

とから、歌ことばの放棄が試みられるようになり、兼家不在の奇妙な解放感や、感性の老いといった、歌にもなりえぬような「日常」が見出された。とは言っても、その方法は素朴なもので、歌ことばの発想に対して否定を表明するという点のみを取り出せば、中巻までとさほど変っていないようにも見える。しかし、決定的に異なるのは、兼家が「物語の男」でないことのみならず、自分もまた「物語の女」ではないことを露わにし始めたことである。その意味では、中巻天禄二年六月の撫子の記事や、天禄二年十二月の「雨蛙」の記事などにわずかに見られた「自分をカリカチュアライズする態度」（注14）に、こうした変化の兆しが見取れよう。「書く」ことに殆ど不可分な状態で内在していた歌ことばの発想を少しでも放棄することは、回想された経験が即座に「書く」自分へ跳ね返り、再び「回想」へと参照するといった生々しい自己表出を、ある程度抑制する作用を持つてもいる。

冒頭部分に宣言された「古物語」の超克は、上・中巻の長い葛藤の過程を経て、下巻に至って新たな展開を見せている。下巻の「不統一な」ありようとは、言わば素材を「統一」的に把握してしまうような歌ことばの発想から、「書く」ことが少しづつ外れていく道綱母の新たな

表現形成のありようと考えられるのである。

※『蜻蛉日記』は宮内庁書陵部桂宮本を底本として校訂を加え、参考として『改訂新版かげろふ日記総索引本文篇』の頁数行数を示す。『古今和歌集』『古今和歌六帖』は『新編国歌大観』（角川書店）、『和泉式部日記』は『新編日本古典文学全集』（小学館）、『枕草子』は『角川日本古典文学』（角川書店）によりそれぞれ引用したが、表記等私に改めた所がある。また傍線はすべて筆者による。

〔注〕

- 1 木村正中「蜻蛉日記下巻の構造」(『日本文学』一九六一年四月号)。
- 2 柿本奨『蜻蛉日記全注釈』角川書店昭和41年。
- 3 秋山虔「蜻蛉日記の文体形成―地の文に融合する引歌について―」(『論叢王朝文学』笠間叢書昭和53年12月)。また引歌の「無意識を掘り起こす」作用については鈴木日出男「引歌の成立」(『古代和歌史論』東大出版会平成2年10月)。
- 4 平野美樹「雨風にも障らぬもの」考―『蜻蛉日記』中巻の表現形成―(『中古文学第55号平成7年5月)。
- 5 沢田正子『蜻蛉日記』の音(『言語と文芸』一〇六号平成2年9月)。

- 6 石原昭平「蜻蛉日記・下巻の物語性と観照性」(『平安日記文学の研究』勉誠社平成9年)。

- 7 下巻の和歌の姿勢については、小町谷照彦『蜻蛉日記』の和歌と表現(『女流日記文学講座蜻蛉日記』勉誠社平成2年6月)、川村裕子「蜻蛉日記下巻の一考察―道綱と大和だつ人との和歌贈答を中心として―」(『平安文学研究』第69輯昭和58年7月)等の考察がある。

- 8 この点については別にくわしく考察する予定である。
- 9 清水好子「日記文学の文体」(『解釈と鑑賞』昭和36年2月号)。

- 10 この部分の校訂・解釈については、室伏信助「蜻蛉日記研究の近景―序文の詠みをめぐって―」(『日本文学研究の現状―古典』有精堂平成4年4月)及び、平野「やとはむためし」考―『蜻蛉日記』冒頭部分の問題―(『名古屋平安文学研究会会報』第24号)を参照されたい。

- 11 秋山「蜻蛉日記と更級日記―女流日記文学の発生―」(『国文学』昭和56年1月)。

- 12 平野「内在する物語」―『蜻蛉日記』表現の位相―(『日本文学』一九九四年4月号)、及び前掲注4に同じ。

- 13 下巻の問題点として従来論じられている「物語性」については本稿では扱えなかったが、本稿で言う「物語的発想(歌ことばの発想)」といわゆる「物語性」とは、(書く)ことへ

14 の介在という点においては異なる性質のものと考えている。
前掲注9に同じ。

(名古屋大学大学院)